



KNH

巨乳な彼女は人妻



KNH

巨乳な彼女は人妻



彼女はいつも  
憂鬱な表情をしている

「それ以上  
困るのは嫌だ。」

この状態を  
どうせよ  
我慢して  
行くか……

彼女が  
思っている  
こと……



周りの男達が  
知らない時、彼女の本当の姿を  
僕にだけ見せるのだ。

妄想が膨らんでいく。。  
彼女の豊満な胸に  
キュウリを押し込んで。。



胸の谷間から  
見えるそれは  
まるで男性の物の  
やうな。。



彼女がそれを  
じやうじく首を  
たてて舐める。。



しかし実際はそんな事はない。

現実の彼女はセンチメンタルではあるが

僕の事を少しも気にかけてはらない。

無防備なだけの女だ。

でも・・・

だからこそ、彼女が僕の事を好きなのかも

しれないという思いが湧いてくる。



必要以上に意識してしまうのだ。

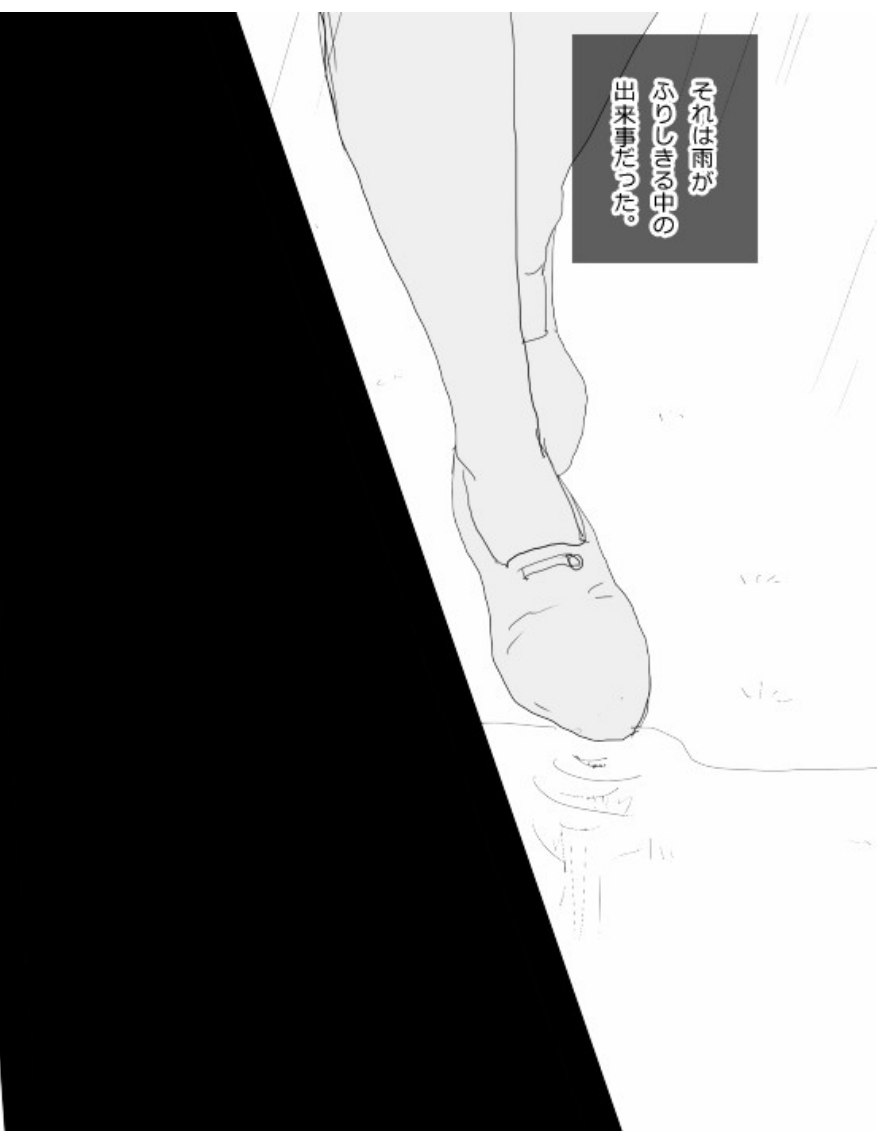
そして

そんなある日。僕は

彼女と距離を縮める出来事に  
遭遇した。



「さっしやんかよ」  
被る女は「さっしやんかよ」  
僕「さっしやんかよ」



それは雨が  
ふりしめる中の  
出来事だった。



僕は彼女を自分の部屋へ連れていった。

そして長い身の上話を聞かされた。

一言でいうのなら不幸……

しかし僕はその話の間も彼女の体に目が釘付けだった。

理性で自分の欲望を押し殺しながら僕は彼女に

親切なふりをし続けた。

そして、それが彼女の信頼を得るのにつながった。

彼女は私に頻繁に会いにきてくれるようになった。

僕はその度に我慢をした。

気を抜いたらすぐにでも彼女を押し倒しそうになる・・・

僕は彼女が気持ちを開いてくれるのを待った。



そしてある日

僕はついに彼女をものにするチャンスに恵まれた。

「○○さんって・・・」

全然、私に興味ないの？・・・」

最初はこういう意味かわからなかった。しかし・・・

「ほら・・・男の人って・・・好きじゃない・・・」

彼女はそう言っつて自分の大きな胸をチラッとみた。

僕はその瞬間理性が飛びそうになった。

完全に誘っている・・・

彼女とセックスが出来る・・・

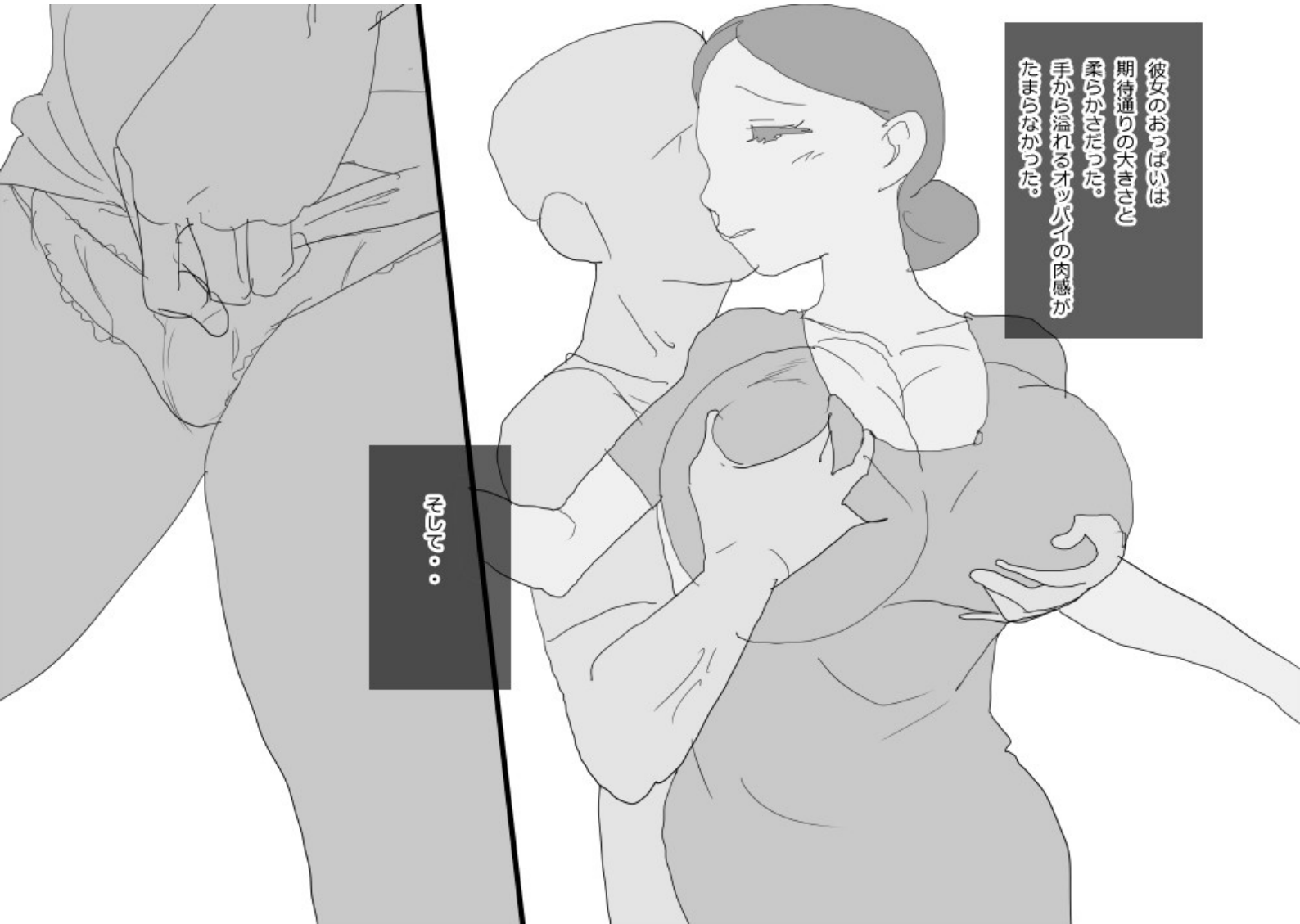
僕は興奮して彼女の体に手を触れた。



彼女の唇は柔らかかった

体に当たってくる胸の感触も

素晴らしく僕は一気に理性がはじけとんだ



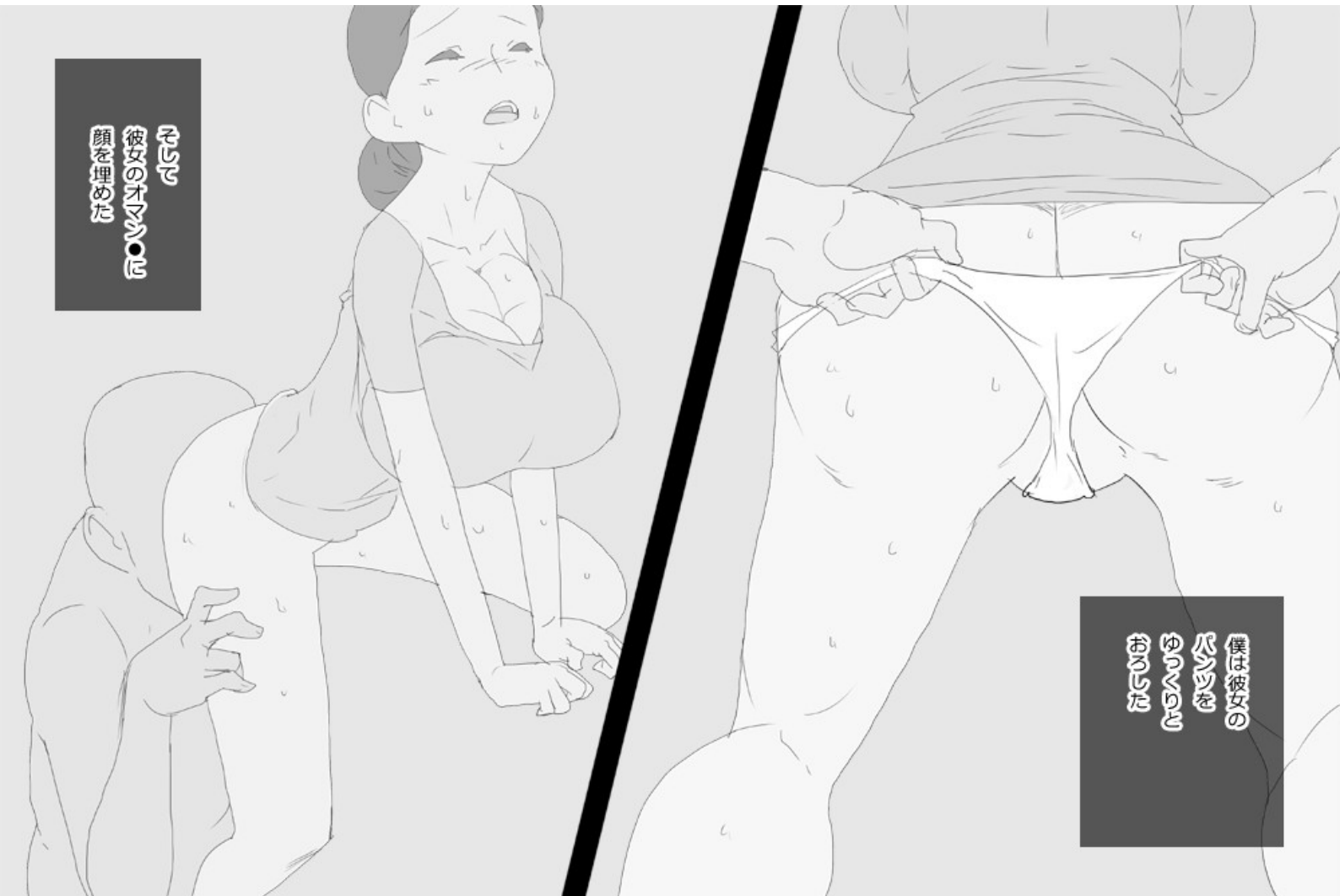
彼女のおっぱいは  
期待通りの大きさと  
柔らかさだった。  
手から溢れるオッパイの肉感が  
たまらなかった。

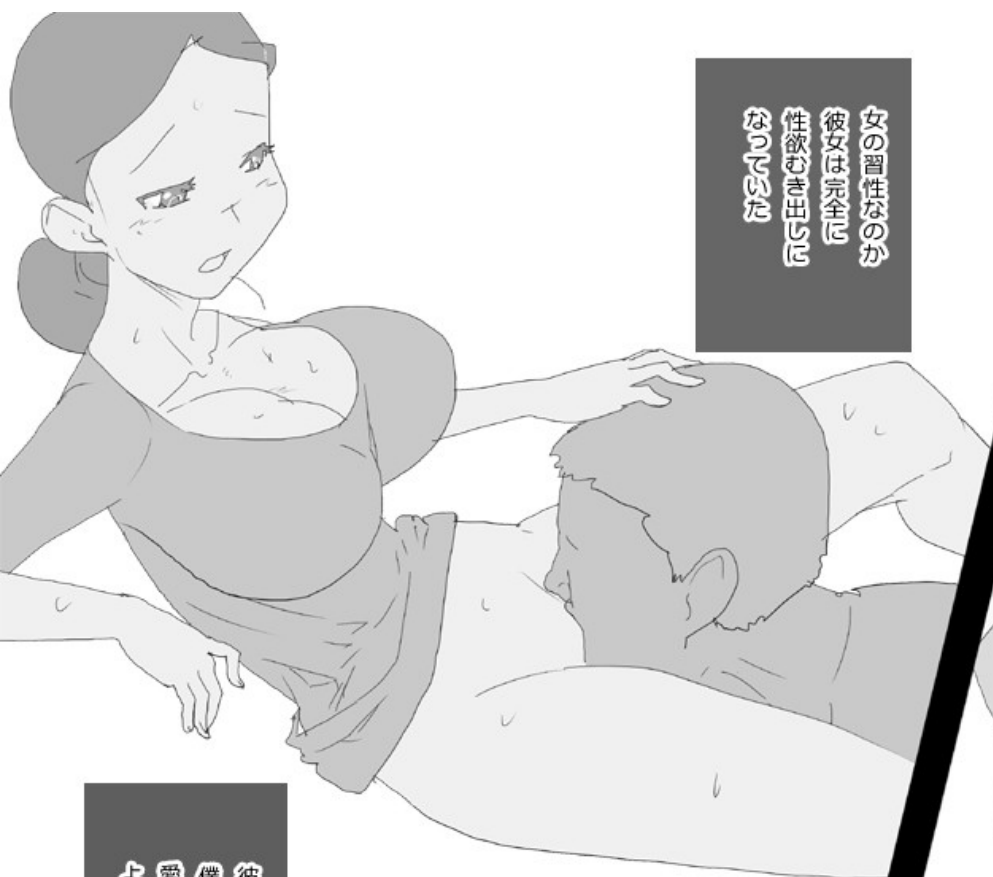
。。。。



彼女が  
彼女のオナニー  
顔を埋めた

僕は彼女の  
パンツを  
ゆすび  
おろした





女の習性なのか  
彼女は完全に  
性欲むき出しに  
なっていた

彼女は  
僕の頭を  
愛して  
くれたのだ



僕は執拗に  
彼女の  
あそこを舐め回す

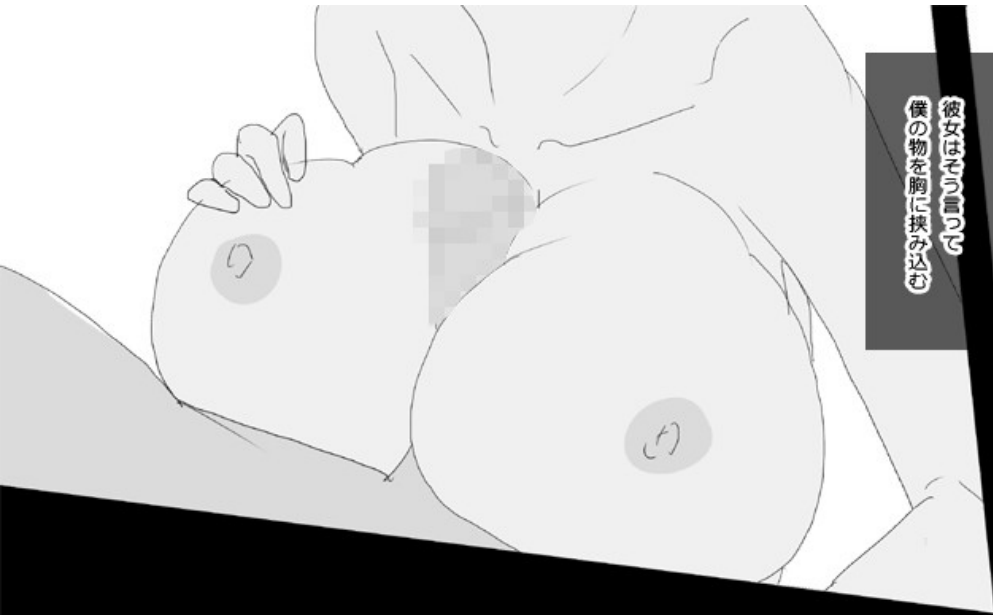
彼女の  
オマンコは僕の  
唾液と彼女の  
愛液でクチヨクチヨ  
だった

そして  
彼女は小さく  
震えながら  
イッた

彼女は夢中になり  
僕を強く  
押しこめ  
た



彼女がまだ  
潮のように愛液が溢れ出した。  
どうでも一回は光景だった。



私だけ気持ちよくなってる  
みんなささ。。。。  
彼女はささ言ってる  
僕の物を胸に挟み込む



完全なる  
バイスリだった  
ビオオとかが見る  
興奮を越えてきた



彼女のおっぱいの  
肌には  
肉感が  
ありません

おっぱい  
が  
硬い  
感じが  
する

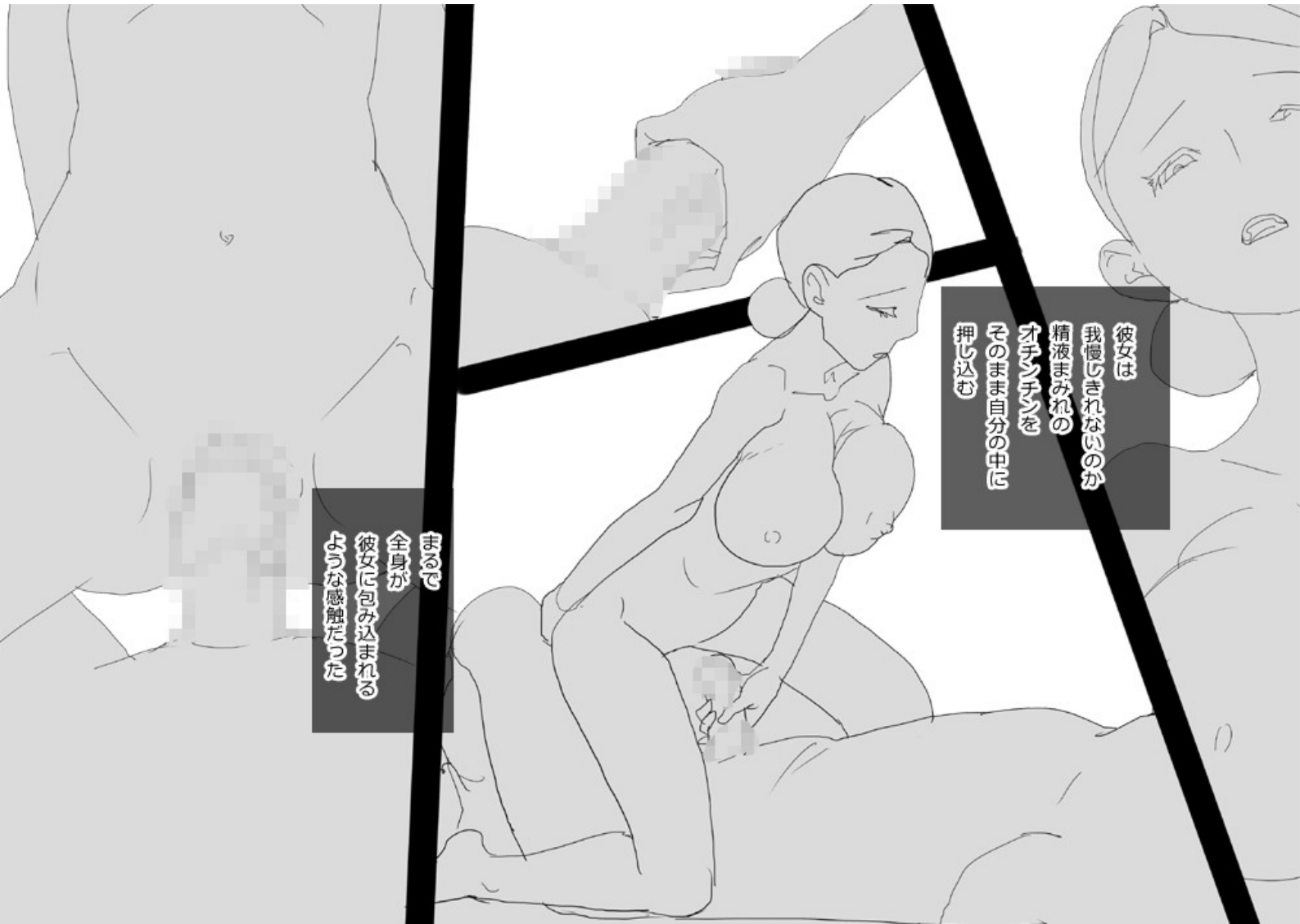


僕は  
彼女の口内に  
そのまま射精した



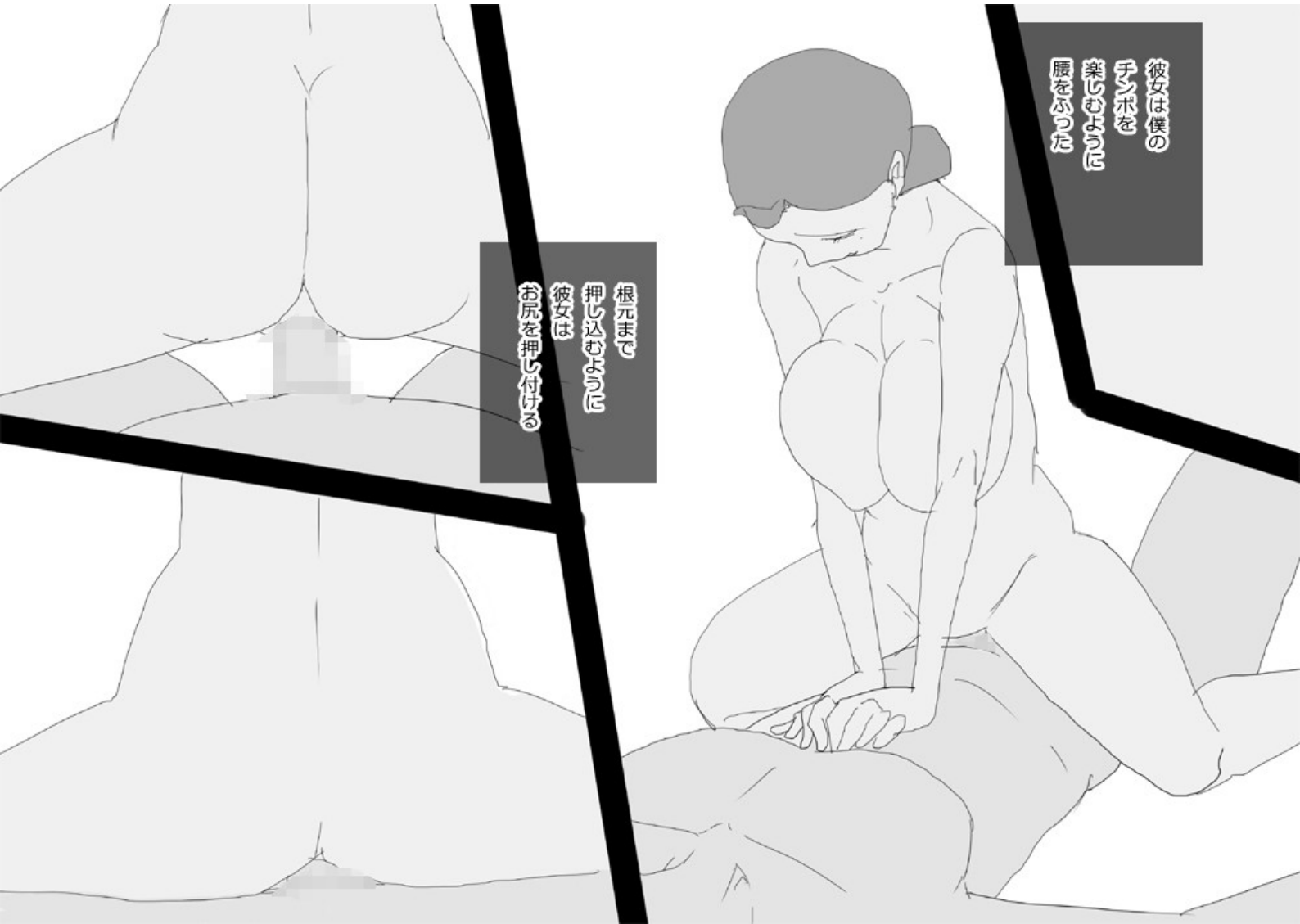
旦那に  
仕込まれたら  
彼女のテクニクは  
すごかった





彼女は  
我慢じきれないのか  
精液まみれの  
オチンチンを  
そのまま自分の中に  
押し込む

まるで  
全身が  
彼女に包み込まれる  
ような感触だった



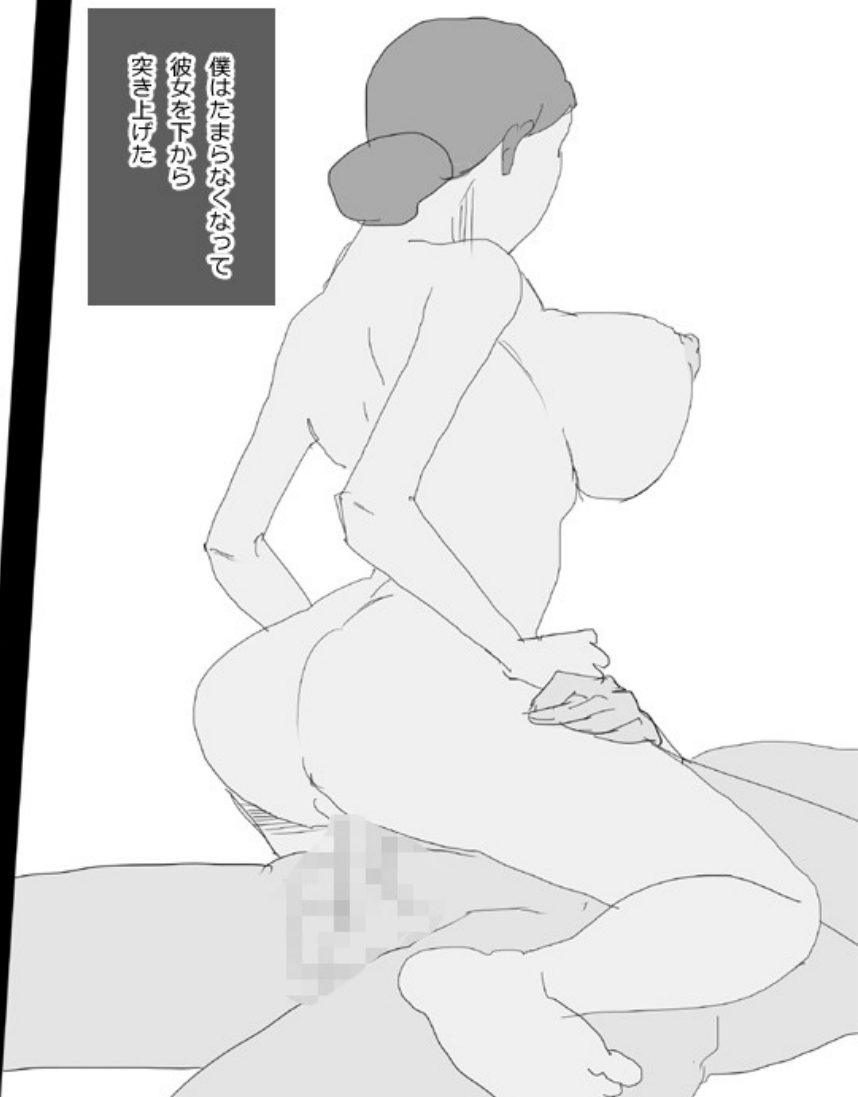
彼女は僕の  
チンポを  
楽しむように  
腰をふった

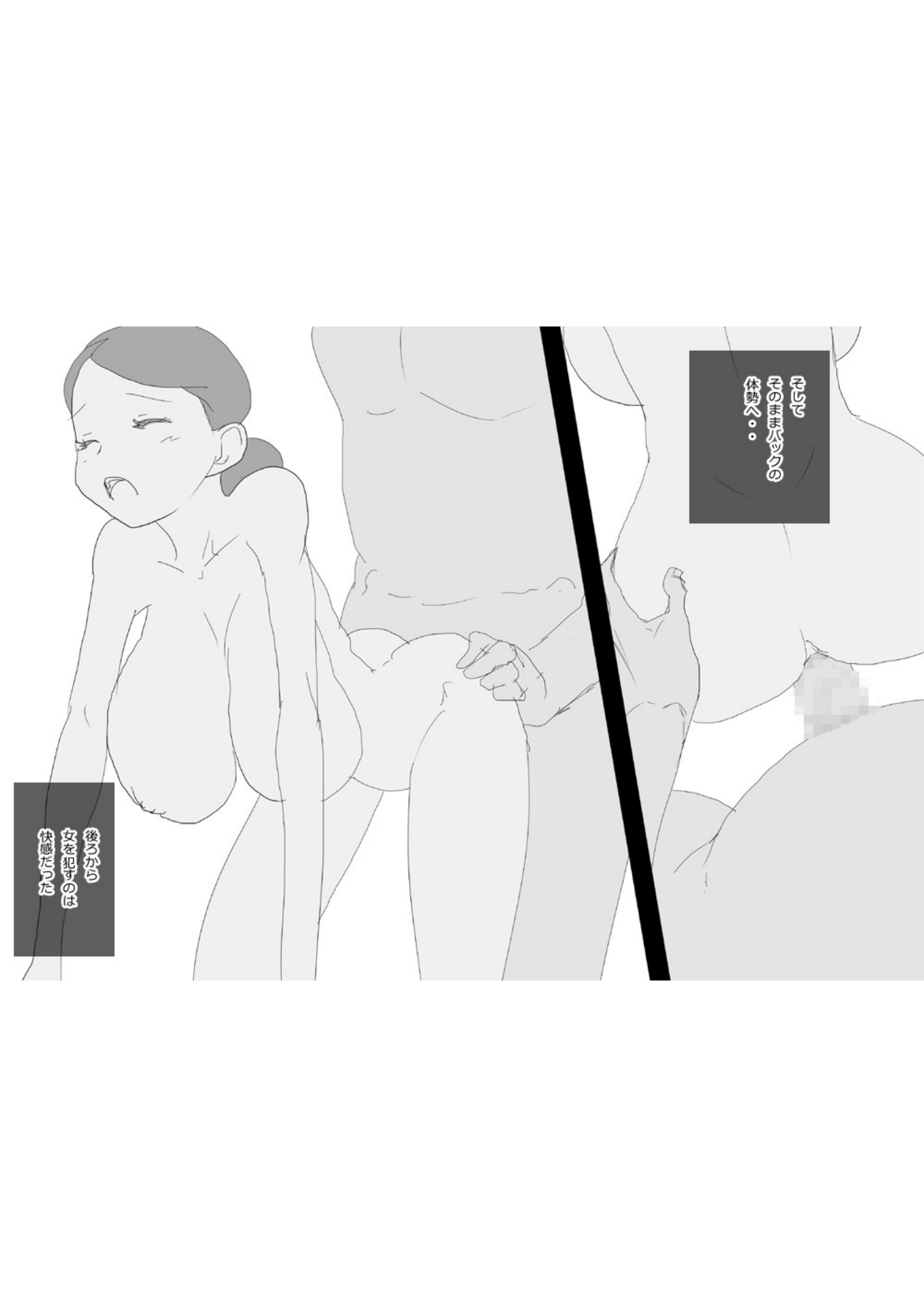
根元まで  
押し込むように  
彼女は  
お尻を押し付ける



その度に  
彼女の  
大きいおっぱいが  
激しく揺れた

僕はたまらなくなって  
彼女を下から  
突き上げた





そして  
そのままバックの  
体勢へ。。

後ろから  
女を犯すのは  
快感だった

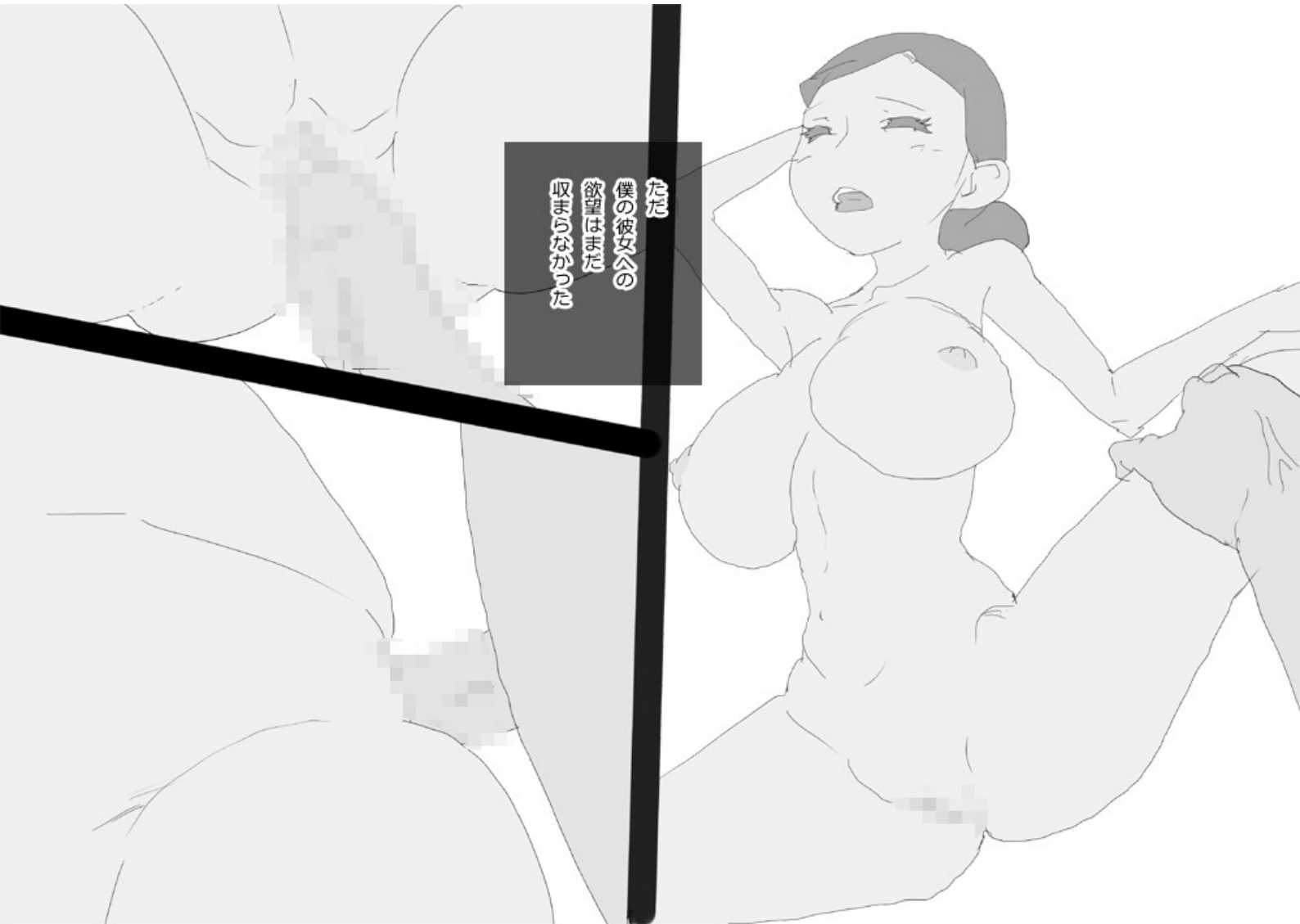


僕はその時  
中に吐す  
激しく彼女を  
突いた

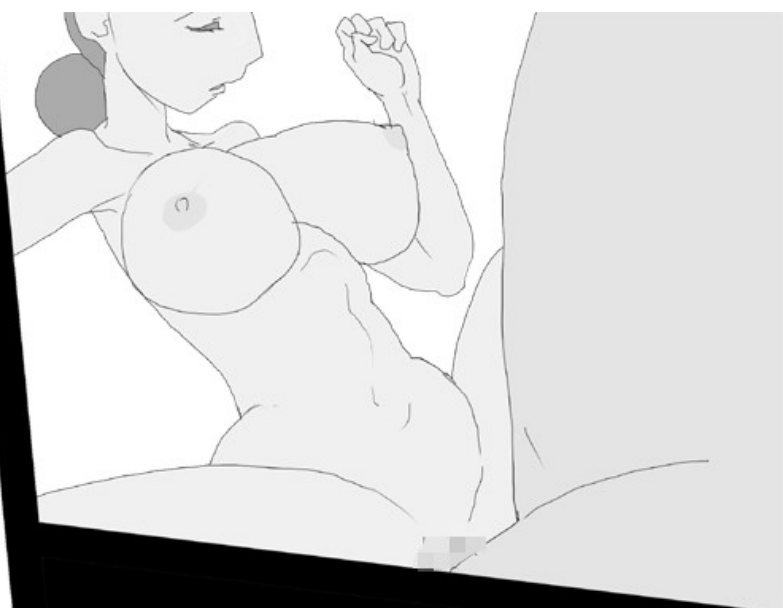


僕は  
全てを彼女の  
中に注ぎ込んだ

彼女も  
息を激しくしながら  
いった



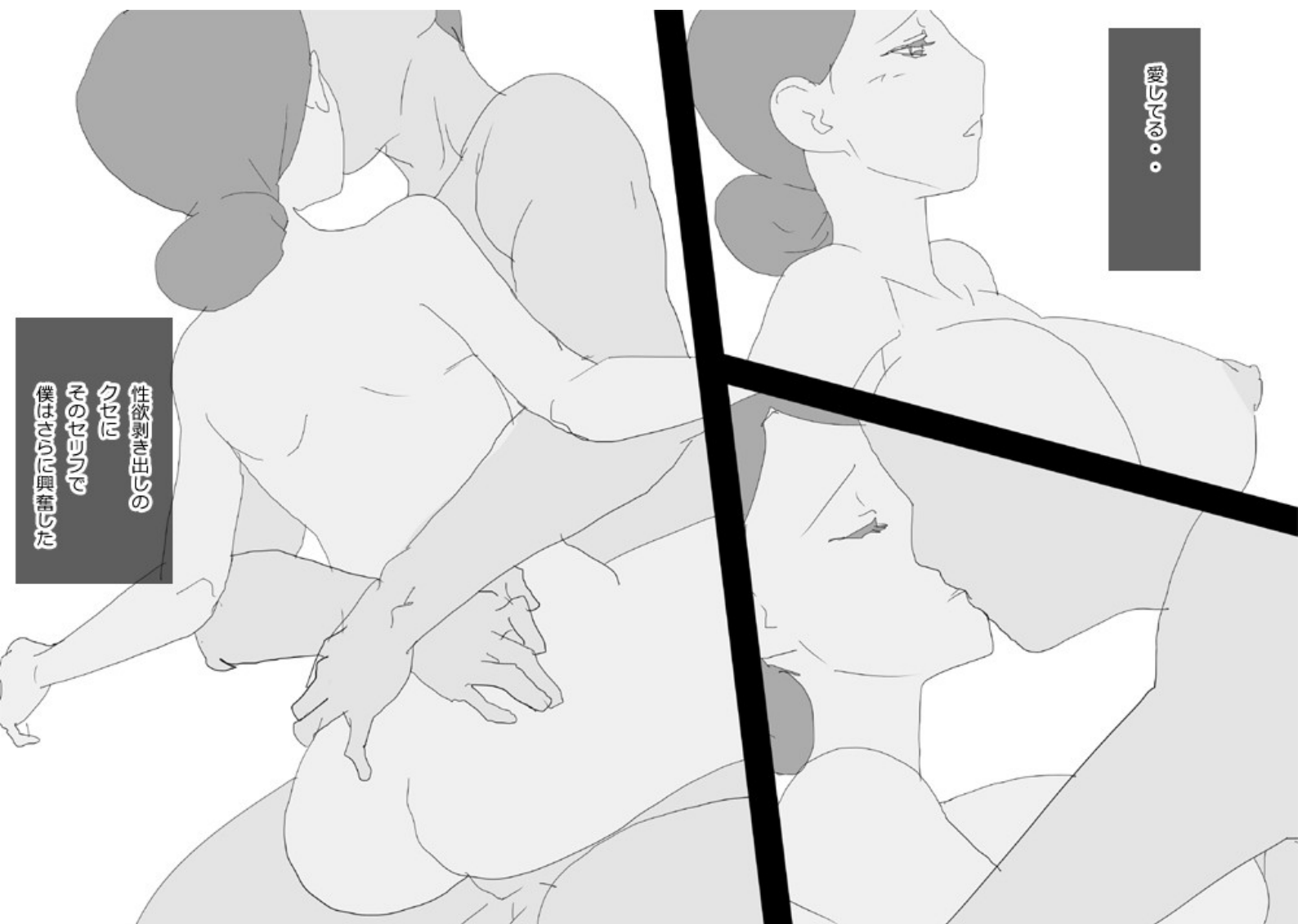
ただ  
僕の彼女への  
欲望はまだ  
収まらなかった



彼女を全部  
僕の物に  
したかった

。。。。

性欲剥き出しの  
クセに  
その瞬間に  
僕は。。。。興奮した





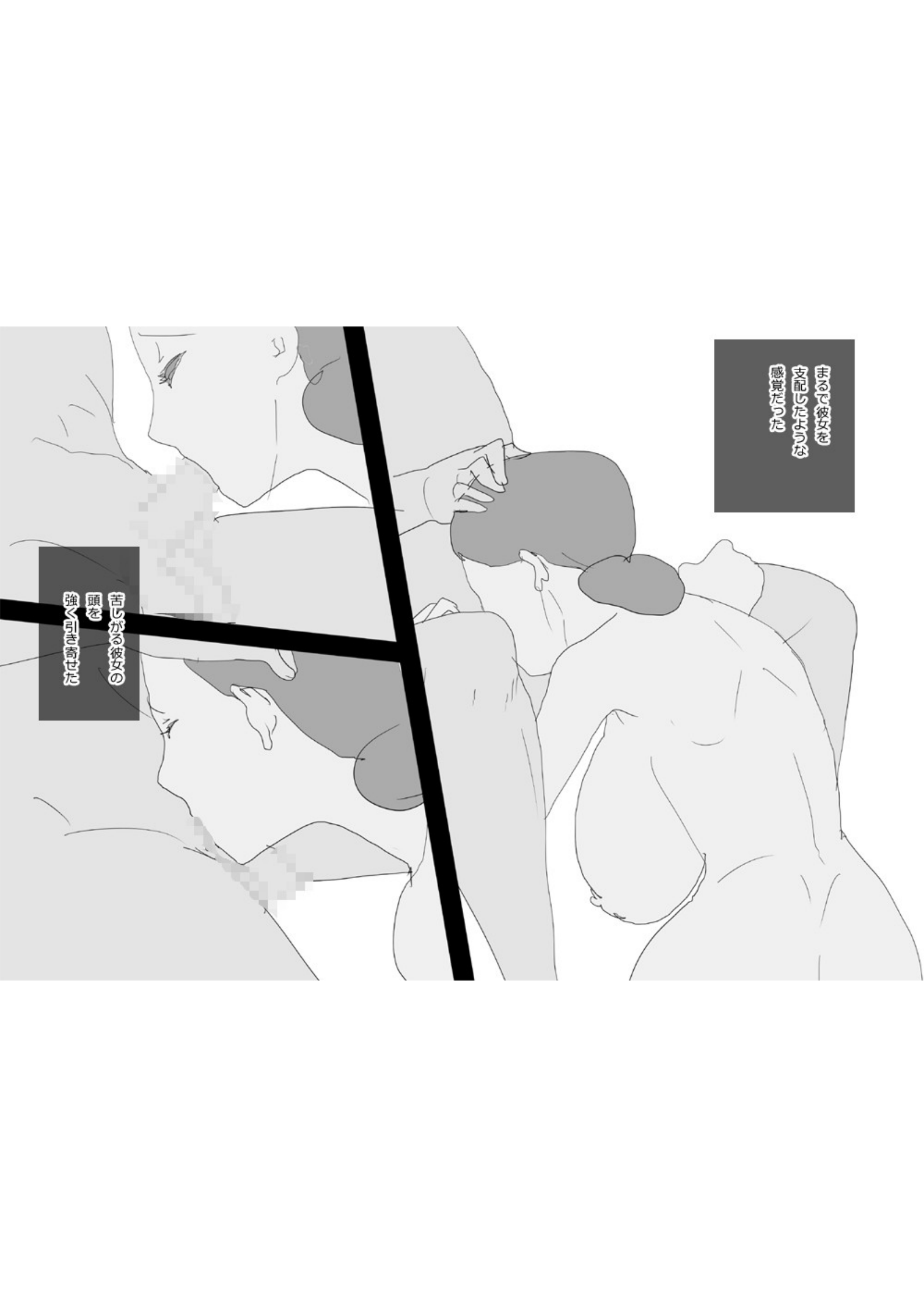
愛してる  
愛してる  
その言葉を連呼しながら  
僕は又中出しをした

先ほどと合わせ  
彼女の膣内から  
納まりきらなくなった  
精液があふれ出した



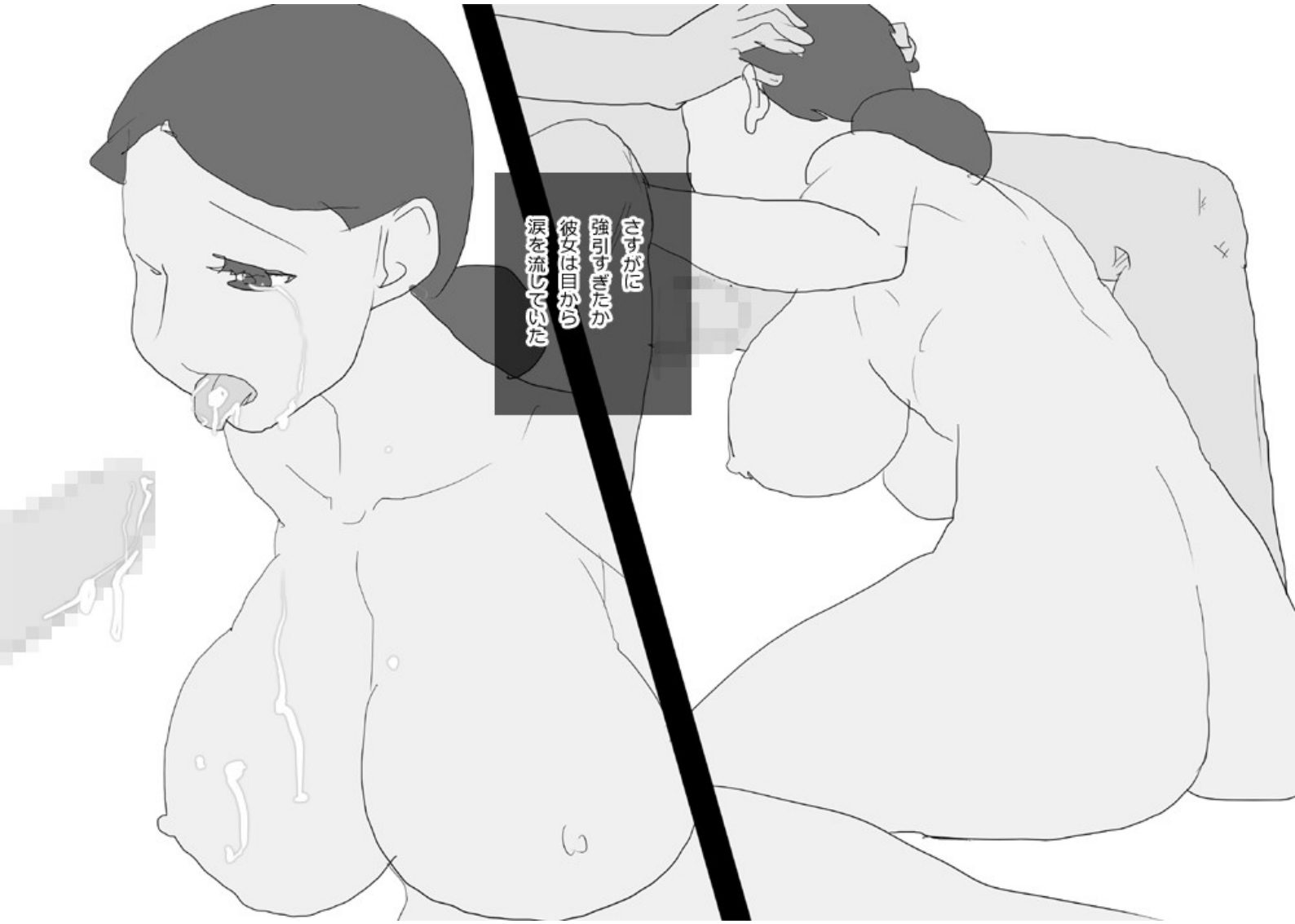
気持ちよほ  
またすぐに  
自分の物が  
回復してゐるの  
が  
わかった

息の荒い  
彼女口に  
僕はまた  
チンポを押し込んだ



まるで彼女を  
支配したような  
感覚だった

苦しがる彼女の  
頭を  
強く引き寄せた



さすがに  
強引すぎたか  
彼女は目から  
涙を流して来た

それでも彼女は毎日僕のもとを訪れてはセックスを繰り返すようになった。

僕は次第に彼女を抱くのが当たり前のようになっていた。

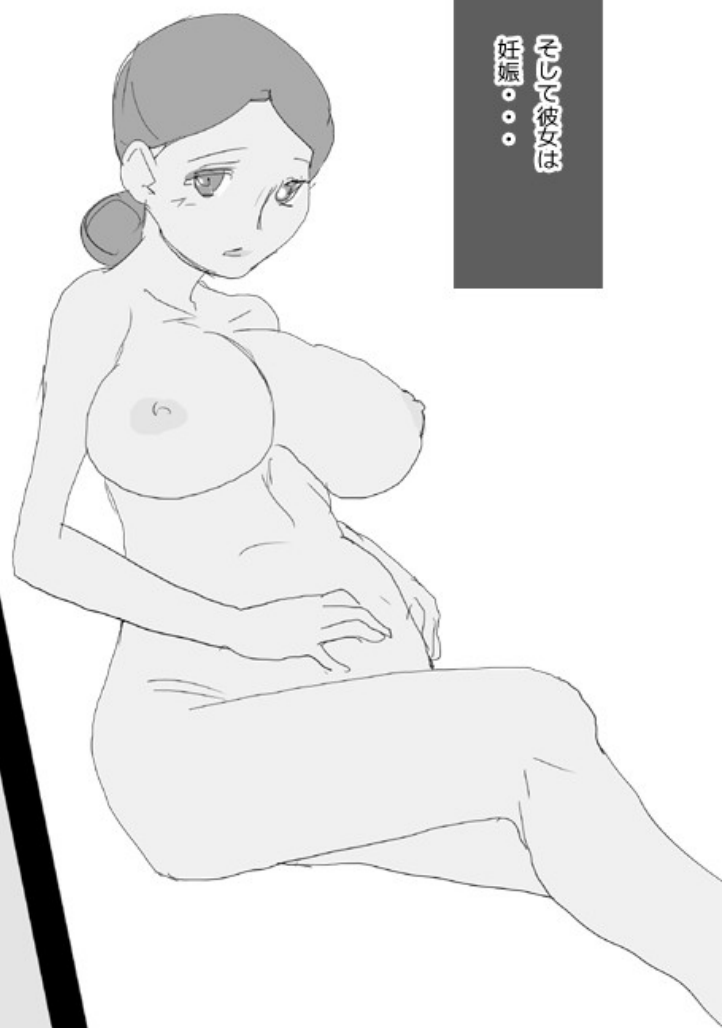
そして自分の気持ち  
彼女を性欲の対象として

見てみるようになった。

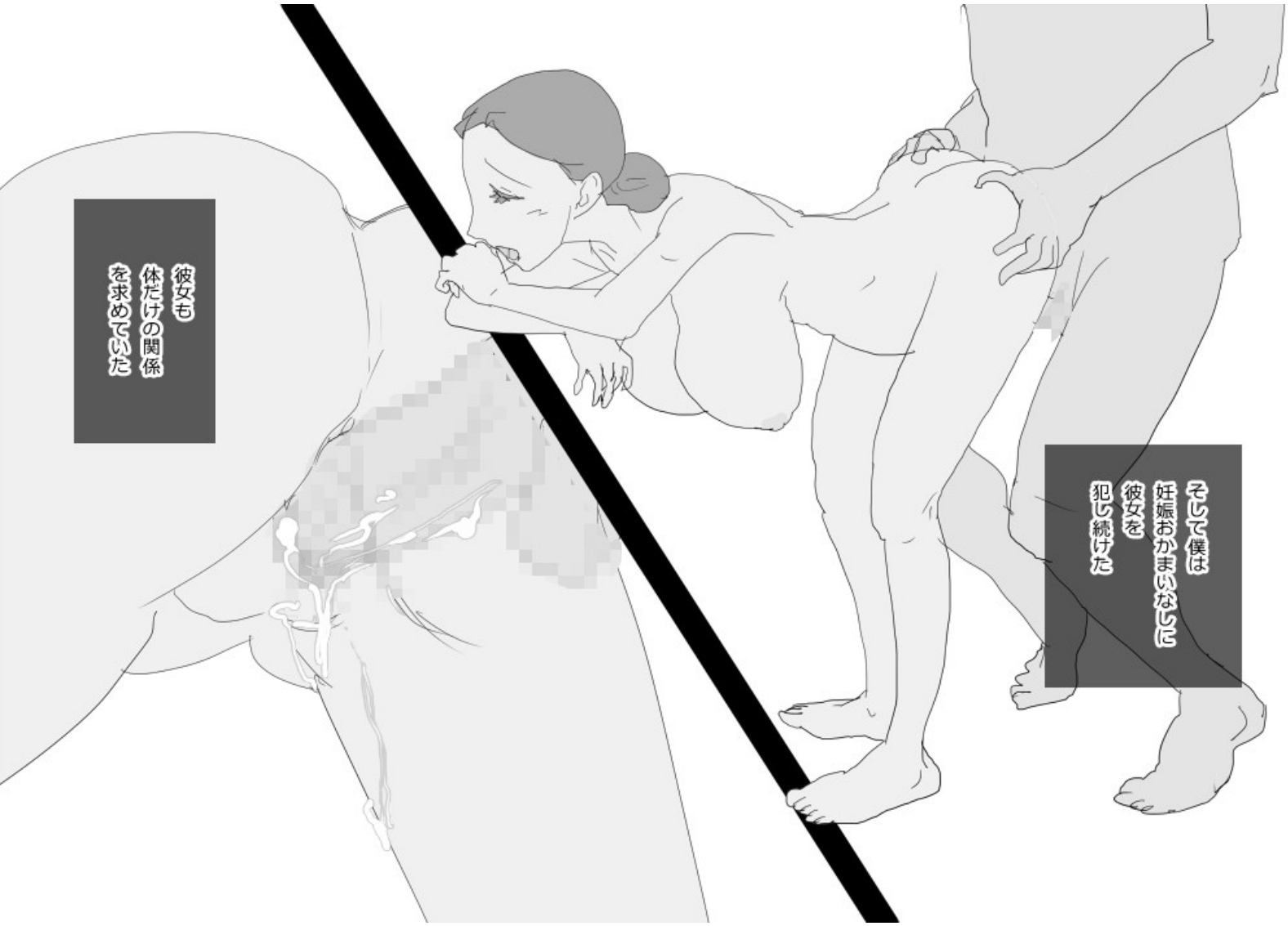




あふれ出す  
おっぱいで  
また違う興奮をした。



そして彼女は  
妊娠。。。



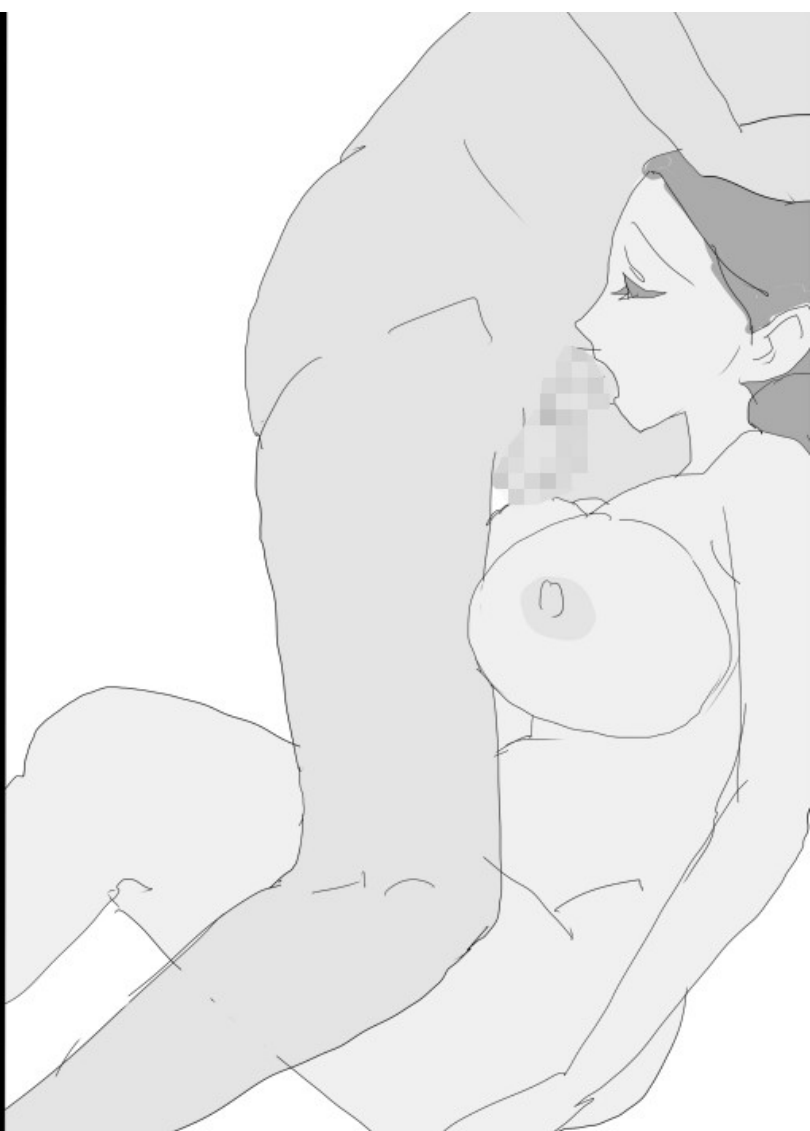
彼女も  
体だけの関係  
を求めていた

そして僕は  
妊娠おかまいなしに  
彼女を  
犯し続けた



もう彼女は  
僕の自由になる  
玩具だった

妊婦は  
妊婦で別の  
エロさがあった



性欲処理マシーンと  
化した彼女を  
僕は入れては睡ませ  
次第に自分の色に  
染めていった



女を飼う。。。  
僕は彼女を24時間自分の部屋に閉じ込めた  
。。。彼女ばかり僕の入ってばかり







オマ... ケ?